様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　６ 月　５ 日現在

機関番号：１２５０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2019
課題番号：１７Ｋ１２２０８

研究課題名（和文）認知機能低下が生じた高齢インスリン療法患者・家族への援助指針の精錬と実装化

研究課題名（英文）Refinement of the Nursing Guide for elderly insulin user with diabetes and mild cognitive impairment

研究代表者
黒田　久美子（Kuroda, Kumiko）

千葉大学・大学院看護学研究科・准教授

研究者番号：２０２４１９７９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,600,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究の目的は、認知機能低下が生じた高齢インスリン療法患者・家族への援助指針を開発し、実践の場で活用できるための実装性を高めることである。先行研究にもとづいて援助指針案を作成し、21名の認知症看護・糖尿病看護の専門家に内容妥当性、表現、使用方法等についてのインタビュー調査を実施した。専門家の意見にもとづき精錬を行い、６つの指針ごとに、援助方法、留意点、適切性の視点、具体例を示し、巻末にはエピソード集を掲載した援助指針の冊子体を作成した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
認知症患者への支援は日本の喫緊の課題である。その中にはインスリン療法が不可欠な高齢糖尿病患者も含まれ、認知機能低下のある糖尿病患者への支援に関しては医療者にとって困難感が大きく、優先度の高い研究課題といわれている。認知機能低下と糖尿病の２つの状態をあわせもつ人々への療養支援に関する研究は日本、海外ともまだ少なく、本研究は先駆的である点に学術的意義がある。また、高齢インスリン療法患者・家族の生活や糖尿病療養に貢献するだけでなく、支援する医療福祉介護関係者のよりよい支援に向けた動機を高める点に社会的意義がある。

研究成果の概要（英文）：To verify of validity and refine Nursing Guide for elderly insulin user with diabetes and mild cognitive impairment, data were collected through interview with 21 expert nurses of the Diabetes Nursing and Dementia Nursing. As a result of refinement, Booklet of Nursing Guide was developed that provide six core concepts, and for each six concepts, approach, points of attention, viewpoint of the adequacy, specific examples and collection of episodes.

研究分野：糖尿病看護

キーワード：インスリン注射　認知症　援助指針

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

糖尿病では認知症の合併のリスクが高く（Kopf et al,　2009）（Yoshitake et al, 1995）、今後、認知機能低下のある糖尿病患者の増加が予想される。その中にはインスリン療法が不可欠な高齢糖尿病患者も含まれる。認知機能低下が生じても、安全にインスリン療法が継続できること、他者からサポートを受けながらも安定して療養生活が送れるための看護支援が必要である。認知症の方への支援の基本的考え方（パム　ドーソン, 2002）は示されており、糖尿病診療においても、包括的高齢者機能評価(comprehensive geriatric assessment :CGA)（鳥羽研二, 2003）の活用がすすめられている（荒木, 2012）。しかし、多くの看護師が「認知症を合わせもつ糖尿病患者への看護」に困難感を抱えている現状がある（正木ら, 2012）。

一方、実際に自己管理から他者のサポートを受けながらの療養生活へよい転換が図れている患者・家族も存在する。このような先例に基づき、インスリン療養患者への援助の指針をもてることで、現在の困難な状況の解決を後押しすることが可能だと考える。

筆者らの先行研究において、認知機能低下によりインスリン自己注射を自己管理から他者のサポートを受けた方法に変更し、在宅で一旦、療養継続ができた高齢インスリン療法患者・家族の事例について、看護師が経験した事例として調査し、よい転換がはかれた先例における看護師の支援、模索のプロセスをデータとして得た。そのデータを質的統合法（KJ 法）で分析した結果、認知機能低下が生じた高齢インスリン療法患者・家族への援助指針の６つの柱を得ており、それらにもとづいて、実践の場で活用できる援助指針を開発したいと考えた。

なお、明らかに認知機能低下が生じていることが推察されていても、認知症の診断を受けていない高齢者もまだ多いことから、本援助指針では、「認知機能低下が生じた」状態を、認知症あるいは軽度認知障害（MCI）の診断の有無を問わないことにした。

支援に困難を感じている事例検討の際に、分析視点として活用したり、全体を読んだうえで、現在実施している支援の振り返りの視点に活用できることを目指した。

２．研究の目的

本研究の目的は、インスリン療法が不可欠な高齢糖尿病患者が、認知機能低下が生じたことにより、自己管理から他者のサポートを受けて安定した療養生活へ移行する時に必要な援助指針を開発し、実践の場で活用できるための実装性を高めることである。援助指針案の妥当性を専門家の意見から検討し、現状で必要とされる事例を追加して、内容・表現・使用方法に関する精錬を行うことを目的とする。

なお、本研究における「サポートする他者」は、家族、友人、地域住民、医療者、調剤薬局、福祉関係者等を含む。

３．研究の方法

１）援助指針案の作成

先行研究では、援助指針の６つの柱とその関係性を明らかにした。それにもとづき、Ⅰ～Ⅵ.【援助の本質を表すシンボルマーク】ごとに、方法、留意点、適切性の視点、具体例とし、巻末に認知症やインスリン製剤の基本的知識、これまでの研究成果等の資料を掲載することとした。

２）専門家へのインタビュー調査

（１）対象者

以下の２つの方法で対象者を選定する。

①援助指針案のもととなった先行研究で協力を得た糖尿病看護の認定看護師、療養指導士 10 名

②認知症看護・糖尿病看護の専門家　10 名

認知症看護・糖尿病看護の専門家については、施設内で横断的に患者支援やスタッフ支援に関わる指導的立場にある者、研修やセミナー等で講師を実施するなどの実績を持つ者を基準に研究者らのネットワークサンプリングで対象者を選定する。

（２）データ収集方法

①依頼方法

ネットワークサンプリングで対象候補者をリストアップし、内諾を得たあと、所属施設の責任者、対象者に、研究計画書、依頼書、同意書、同意撤回書、援助指針案、調査項目、属性等の情報記入用紙を送付し、同意を得た。調査当日にあらためて研究についての説明を行い、同意書で同意を確認した。

②調査内容・方法

個別あるいはグループでのインタビューで調査を行った。調査項目は、内容（必要な支援が示されているか、妥当であるか、不足点はあるか）、表現（わかりにくい表現、表現の工夫への意見等）、使用方法（どのような対象に、どのように使用することが期待されるか、可能か）、巻末の資料に必要な内容は何か、気づいた点である。

依頼時に調査項目を同封し考えてもらった上で調査を行った。グループインタビューは、複数の対象者が参加する研修、セミナー、委員会等の機会を利用し、利便性をはかった。

（３）分析方法

インタビューは、承諾を得られた場合は録音し、逐語録におこす。承諾の得られなかった場合

には、メモをとり、インタビュー後に記録に起こした。調査項目ごとに関連のある内容を整理し、内容の相違により集約整理を行った。
（４）倫理的配慮
　研究者の所属機関の倫理委員会の承認後、任意性の保障、インタビューに伴う時間的負担を軽減するために事前の資料の送付や日時等の調整、プライバシー・匿名性・個人情報の保護、患者・家族の事例についての情報が内容に含まれた場合、意味内容が変化しない範囲で、省略や記号で置き換える等によって個人が特定できないまで加工し、看護師が経験した事例としてデータ化する、データの保管や情報流出防止を行った。
　なお、研究協力の対象者には、2,000 円程度の謝礼を用意した。

３）援助指針の精錬
　専門家のインタビュー調査の結果にもとづき、表現のわかりにくい箇所を修正し、現状でさらに必要な具体例を追加し、援助指針の精錬をはかった。

４）追加調査及び活用調査
　専門家によるインタビュー調査の結果、認知症の方に皮下連続式グルコース測定器機を使用している事例について情報を得た。その後、成果報告を行った学術集会において、多くの事例を経験しているクリニックの医療者と交流でき、ヒアリング調査を計画した。
　また、専門家のインタビュー調査時に、援助指針の活用希望があり、活用状況の調査を計画することとなった。

４．研究成果
１）専門家へのインタビュー調査結果
　糖尿病看護の専門家 16 名、認知症看護の専門家 5 名にインタビューを行った。全員が認定看護師あるいは指導者的役割を担っていた。
　援助指針案の内容については、言語化されている指針の必要性はある、6 つの柱は妥当で網羅性もある、6 つの柱に示した番号が援助の順序性を示すものと誤解される、インスリン療法をできることが目標ではなく豊かに生活できることなので援助目標が表れるタイトルの見直し、前提を示す必要がある等の意見を得た。使用方法では、テキストにしてほしい、振り返りやカンファレンス等で使いたい、経験の浅い看護師でも使えるようにアセスメントシートやチェックシートのような形態が望ましい、対話の中で認知機能を捉える資料がほしい等の意見を得て精錬を行った。
　その際、多くの専門家から事例を示す意義に意見が述べられたため、事例の詳細をエピソード集としてまとめた。事例のエピソードは、個々の患者における状況と指針の必要性の理解を助け、事例集のような形式で指針と合わせて使うことが考えられた。
　また、地域包括ケアに必要な内容として、訪問看護の事例等を追加することとした。

２）援助指針の精錬
　専門家へのインタビュー調査にもとづき、援助指針案を修正し、援助指針を精錬した。
　はじめに、援助指針の目的、援助指針のもととなった研究成果、構成、活用方法を冒頭に示し、援助指針の内容は、Ⅰ～Ⅵ.【援助の本質を表すシンボルマーク】ごとに、以下を掲載した。
１．方法：援助方法であるが、前提となる看護師の認識や連携範囲も含む
２．留意点：援助時の留意点に加え、判断に迷う、困難になる理由なども含む
３．適切性の視点：援助が適切であるかを随時判断する際の視点を示す
４．具体例：上記の１～３を含む具体例を示す
　また、エピソード集には、【援助の本質を表すシンボルマーク】ごとに場面の状況がわかる単位にした複数の小エピソードと、事例の経過にそったエピソードを示した。結果、計 17 ページの冊子体として完成した。
　６つの援助指針のシンボルマークは、以下の内容である。
【認知機能低下の探索：機能低下のキャッチと客観的事実による慎重な確認】
【生活・自己管理状況の変化の探索：高齢者本人から把握しきれない詳細情報を得る機会】
【自己注射の必要性、継続力の見極めと工夫：無理と決めつけず、手順の簡略化やサポートで実施しやすい方法を探る】
【自己注射継続への創意工夫：安全が維持されるための関係者間での相談協力と今後に備えた体制づくり】
【本人の自負心や意向の尊重：相互理解、支援の影響を確認しつつ、迷いながらすすめる支援】
【家族の負担・苦労の査定と支援の検討：現実的で継続可能な支援体制の再構築】
　シンボルマークは、援助の本質を示すものであり、表現を研究者間で充分に検討した。なかでも、「迷いながら援助をすすめる」という表現については、高齢者本人の意向を尊重する上で、本当に高齢者本人の意向にそっているかと迷わないことの方が適切でないと検討し、あえて、「迷いながら」という表現を残した。

３）追加調査及び活用調査

皮下連続式グルコース測定器機の使用例の多い糖尿病専門クリニックへの調査と実践での使用を計画していたが、新型コロナウィルス（COVID-19)感染症の影響で未実施となった。
検証・精錬に協力いただき、使用を希望している専門家に援助指針を配布した。

＜引用文献＞

・荒木　厚．（2012）．高齢者糖尿病診療における包括的高齢者機能評価の意義．日本臨床 70 suppl 5, 75-79
・Kopf D, Frölich L.（2009）. Risk of incident Alzheimer's disease in diabetic patients: A systemic review of prospective trials. J Alzheimer's Dis, 16, 677-685
・正木 治恵，数間 恵子，黒田 久美子，清水 安子，瀬戸 奈津子，大原 裕子ら 研究推進委員会(平成 20 年度～平成 24 年度)．（2012)．「糖尿病教育・看護領域に求められている研究課題の優先度の特定」調査報告．日本糖尿病教育・看護学会誌，16(2)．210-213
・パム　ドーソン，ドナ L.ウエルズ，カレン　クライン．（1993／2002，pp156-158)．山下美根子（監訳），Enhancing the abilities of persons with Alzheimer's and related dementias: a nursing perspective，痴呆性高齢者の残存能力を高めるケア．医学書院
・鳥羽研二（監）．（2003）．高齢者総合的機能評価ガイドライン．厚生科学研究所
・Yoshitake T, Kiyohara Y, Kato I, Ohmura T, Iwamoto H, Nakayama K, et al. (1995). Incidence and risk factors of vascular dementia and Alzheimer's disease in defined elderly Japanese population: Hisayama Study. Neurology, 45, 1161-1168

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計0件

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 黒田 久美子 ， 内海 香子 ， 清水 安子 ， 正木 治恵
２．発表標題 認知機能低下が生じた高齢インスリン療法患者・家族への援助指針案の妥当性の検討 ―専門家による内容・表現・使用方法の精錬―
３．学会等名 日本老年看護学会第24回学術集会
４．発表年 2019年

１．発表者名 黒田 久美子 ， 内海 香子 ， 清水 安子 ， 正木 治恵 ， 錢 淑君
２．発表標題 認知機能低下が生じた高齢インスリン療法患者・家族への援助指針の開発過程で得た事例のエピソード
３．学会等名 第24回日本糖尿病教育・看護学会学術集会
４．発表年 2019年

１．発表者名 黒田久美子，内海 香子 ， 清水 安子 ， 正木 治恵 ， 錢 淑君
２．発表標題 認知機能低下が生じた高齢インスリン療法患者・家族への援助指針の開発
３．学会等名 第22回日本糖尿病教育・看護学会
４．発表年 2017年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	清水　安子 (Shimizu Yasuko) (50252705)	大阪大学・医学系研究科・教授 (14401)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	錢　淑君 (Sen Shukukun) (50438321)	千葉大学・大学院看護学研究科・准教授 (12501)	
研究分担者	正木　治恵 (Masaki Harue) (90190339)	千葉大学・大学院看護学研究科・教授 (12501)	
研究分担者	内海　香子 (Uchiumi Kyouko) (90261362)	岩手県立大学・看護学部・教授 (21201)	